写真は昔の錦町
中央大通り
右手前に劇の前身
中央劇場がある

でした。

〈司会者〉 雪の深い時、女の人はひどかったでしょうね。

〈五十嵐さん〉 ひどかったけれども、がまんしていました。（笑声）なにせないものでしたから。

〈司会者〉 はきものなんかどうでした。例えばわらぐつとか。

〈福田さん〉 わらぐつが一般のはきもので、ゴムぐつなんか最近の話ですよ。

〈伊藤さん〉 ゴム靴をはいている人は、役場の人とか金持ちの人達。親方連中でして、小方そんなことはできませんでしたよ。

〈五十嵐さん〉 わたくしたちは、フカ靴をはいて学校へ行きました。

祝祭日には、ガマの穂であんだ短いガマ靴というのをはいて行ったものです。

このガマ靴は、わらぐつと違って、良い着物のすそが切れないんです。

フチは白いネルでとっているんです。

〈福田さん〉 この五十嵐さんの奥さんは、なかなかの美人でね。（五十嵐さん紅潮）祝日なんかになると紋付を着て学校へ来るんですよ。そりゃあなかなかの美人でした。（笑声）

〈五十嵐さん〉 いやですね、福田さんたら…（笑声）。

〈司会者〉 その頃の酒はどんな銘酒のものがあったんですか。

〈福田さん〉 増毛の○が一番高いね。留萌だって酒屋はあったんですよ。笠原さん―これはいまの五十嵐さんの下で、川ぶちの酒屋でした。銘柄は「北の鶴」でした。

あとで、相馬さんのやっていた留萌清酒に合同されましたがね。留萌醸造株式会社といいました。

〈司会者〉 農村では、どぶろくなんか造ったもんですか。

〈原田さん〉 造ったもんですね。

《市街地》

昔懐し郭通い

〈司会者〉 冬の話が多いようですが、夏は盆踊りなんか盛んだったんですか。

〈福田さん〉 大昔は知らないが、私等子どもの頃は今の警察の所が一番盆踊りが盛んでした。

それで十二時過ぎると、今の拓銀のところにあった遊郭にさがって来て…。

〈伊藤さん〉 その頃は時間の制限なんかありませんでした。

その頃の遊郭はヤマジュウ、それに南部楼、①、フザン閣、桃開楼など六、七軒あったようです。

〈福田さん〉 ここの遊郭は新郭といってましたね。

なぜ新郭といったかといいますと、昔は旧市街に遊郭があったのです。それが区画整理によってここに移ったのです。

新しいくるわだから新郭といったのです。

〈司会者〉 遊郭と普通の家とははなれていたものですか。

〈福田さん〉 遊郭をここへ持ってくると街はずれだったので風紀上も良いということだった。

ところが、街がだんだんこちらに移って来て、遂に街の真中になってしまって移転問題も起きましたが、それが実現しないうちに今日になってしまいました。

〈伊藤さん〉 昔の市街地の区画では、一番はずれに持って来たものです。

〈司会者〉 まちもずい分と変わったと思いますが、

〈五十嵐さん〉 わたしの生まれたところは、いまは港湾の中になってしまいました。

港が出来る（港を堀る）というので、近所の人たちは皆散り散りになったわけです。

山の上から留萌の市街地を見たら留萌川が本当にヘビのように曲りくねって海に流れていたもんです。

〈福田さん〉 紀念橋は、春になると雪どけの水で、あの橋がもたなくなるんです。

そこで消防が出て、上流で氷をわり、氷の上にのって流し、あの橋脚を守ったもんです。

〈五十嵐さん〉 わたしたち学校へ行くときはなんともなくとも、帰りには水が出て、帰られなくなるんです。

〈司会者〉 昔のはやりものなどはどうでしたか。

〈福田さん〉 そうですね その頃はやったものは、歌では「日・清（日本と支那の意。明治二十七、八年ころのもの）だんぱん。はれつして…」なんかはやりました。ね。

〈五十嵐さん〉 そうそうみんな踊なんか女でも余興にやりましたね。

㋮亀屋のお母さんなんか上手だったでした。

〈福田さん〉 それからね何と言ったか、ハイカラさんが何とか―言った歌ね。

〈五十嵐さん〉 そうそう「嫌だ嫌だ、ハイカラさんが嫌だ。頭の真中にサザエのつぼやき、なんてまがいんでしょ」というような歌でした。日露戦争の次の歌でした

《青年》

発明家の伊佐津さん

〈司会者〉 福田さん、あの当時青年の武張ったものがありませんか。

〈福田さん〉 ありましたよ。留萌にね、日活青年会というものがありましてね

これは伊佐津さんなんかも関係してましてね、今の金子君はなかなかまじめな青年でしたね、大いにやったものでした。

しかし、そういう連中はどちらかというと、貴公子然たる連中ばかりで、われわれとちょっと違っていましたので、われわれわんぱくものは向うをはったというわけではないが、これに対して留萌の体育会というものを作ったのです。

そして最初運動会なんかこの体育会がやったものです。

その時の歌を今でも覚えていますが「暑寒の山のうすみどり、瀬越の浜に風ありて、あらしとどとうと俺たちの、三つは留萌の花じゃもの」というのであったな。

これは桑山という先生が作ったもので、作曲は間島という先生でした。

小学生までも全部歌ったものです。

〈笹島さん〉 今の人はみなハデですが、昔は頭の方も長い髪をしているものはなく、みな短くしていたものです。

オモチャにしても、せとものを集めるとか…。

〈司会者〉 伊佐津さんがね。なんでもスキーを一本ストックでやったとか…。

〈福田さん〉 あの人はミカン箱で蓄音機を作ったんです。

そして、レコードだけ買って来てならしていたんです。

そうして、当時のスキーは、前の方にスプリングがついておったでしょう。ところが伊佐津さんが発明したのは違うんですよ。伊佐津スキーを作り出したんです。あの人も心臓でね、あの頃、旭川へ単独で留萌からスキーの大会に出たんだ

そうして、いまで言えば一キロ―二キロの遠距離に出て一等をとったんです。

新聞に〝留萌の遠征軍言々…〟と出た。とたんに、その伊佐津式スキーが小樽の学校ではやったんです。

それで、わたしは他の人のように小樽でスキーを買えなかったので、伊佐津さんが向いにおったので、そのスキーをもらって乗ったんです。それで、わたしも一等になりましてね、新聞にのりました。（笑声）

とにかく、蓄音機といいスキーといい、伊佐津さんは発明家でしたね。

汽車と電気にビックリ

〈司会者〉 旅行なんかに出たものですか。

〈五十嵐さん〉 留萌の学校でも当時は修学旅行がありました。

わたくしの兄が小学校の時、歩るいて修学旅行に行ったのです。

赤ケットをしょって行ったものですから、小樽に親籍があったのですが、それを見て、留萌の生徒はいなかくさいといわれたものです。

その頃は汽車もないものですから、みんな歩いたものです。

留萌に汽車が通ったのはわたくしが尋常三年生の時でしたよ。

わたくしも、その時はじめて汽車を見ました。

十一月頃でなかったかしら。（注…明治四十三年十月二十三日朝早く学校へ行って紋付を着て、道路がわるいから、足駄を買って来てはいて行ったものですよ

〈福田さん〉 わたくしのおやじが小樽へ行く時は、馬そりを頼んで来て、信砂へ出て、さらに妹背牛に出たものですよ。妹背牛からは汽車があったのです。

〈五十嵐さん〉 汽車が来たらみな日の丸の旗を待って停車場に集ったんです。

そして汽車というものをはじめて見たのですが、みんな万才、万才といって喜んだものです。

〈司会者〉 その当時、小平の金野貫一という人が出したビラがあるのですが、それを見ますと、住民は皆礼服着用のうえ、汽車をお迎えに出るよう。また各自旗を一本ずつ持参し、何時まで集合のこと…という指令？が村長名で出ているのですよ。

〈福田さん〉 留萌の停車場は、宮本吉五郎という人が請負し、あれは五万円ばかり損をしたものですよ。

〈五十嵐さん〉 それから電灯がついたのは何年あとだったろうか、注…おなじとしの四月）

電気のついた時はびっくりしましたよ。

まあ、まあきれいで、こういうものがしらと感心しました。

あの電灯会社はどこだったのでしょうね。

〈原田さん〉 あれは、今の武内さんの工場の前でしたよ。

〈福田さん〉 あの頃は留萌電灯株式会社で、中島んがあとの所長で、初めて電気を送るとき、八間道路のところに開業というのであかりをつけ、これを点滅したものですよ。

そうすると皆びっくりして、ちょうどお祭りのような騒ぎでした。

〈五十嵐さん〉 その時わたくしの親籍の子どもが鬼鹿から来まして、電気を見て「オド！、このランプ買って行くべ。このランプだまっていれば、ひとりでつくし、ひとりで消える。イーモンダから買って行くべ」（大笑い）

《教育勅語紛失事件》

授業中の先生を取調べ

〈司会者〉 愉快な話ばかりでしたが、留萌で失敗したという話はありますか。

〈福田さん〉 わたくしの覚えているのでは、教育勅語がなくなったという事件がありました。これは大事件でしたよ。

留萌小学校であったのですが、山岡という校長先生の時だった。

明治大帝がなくなって九月十五日が御大葬だったのですが、歌舞音曲が禁じられたわけです。

その時、東京相撲が留萌に来ていたのですが、毎日することもなく瀬越の浜あたりを歩るいていたものです。

そして、御大葬が終って間もなく、この事件が起きたのです。

一番疑いをかけられたのが、三浦という先生でした今でも生きています。北海道剣道連盟の会長しておりますがね。

桐の箱は、生徒の昇降口の縁の下に投げ、勅語は丸めて道庁へ送ったものです

当時としては大事件です

授業中に刑事が来て、教壇から先生を引っぱって行ったものです。（一同しんとなる）

わたくしたちは、勉強どころではなかったよ。

真犯人はとうとう見つからなかったが、先生達は皆左遷されてしまいました。

〈五十嵐さん〉 当時、わたくしが小樽にいたのですが、留萌の先生が小樽に来ているというので、どうしたものかと思っていたのですが、その時の事件だったんですね。

《日本一の借金》

原敬に橋渡しを頼み、解決

〈司会者〉 当時、勅語は教育の中心で、それは大事なものでしたからね。

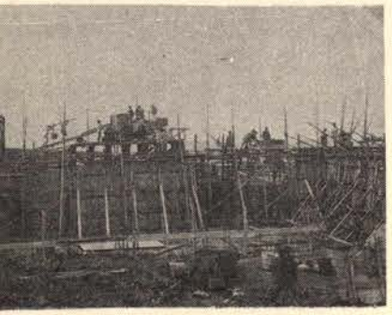
それじゃあ、苦労談。留萌の先人は、皆苦労したと思うんですが。そんな話を聞かせてください。

〈伊藤さん〉 実を結すばなかったのは企業誘致の面で「硫安工場」。

実を結んだのは、例の町債の解決です。

日本一の借金だったんです。二百四十九万四千円でしたから、今のお金にすればどの位になりますか。五百倍とすれば…。（注…十二億四千七百万円となる計算）まあ大した借金だったんです。

保険会社は十四社あり、



写真は配水池工事
（昭和元年）